

書海按針
——学部学生のための読書ガイド——

福谷 茂

經書を読むの第一義は、聖賢に阿ねらぬこと要なり
吉田松陰

あるときはノヴァリスのごと石に花に奇しき秘文を読まんとぞせし
中島 敦

Ce vice impuni, la lecture
Valérie Larbaud

I was fascinated by the magical activity of putting thought on paper,
and I have loved it ever since.
Rudolf Carnap

近世哲学史をおもしろく勉強するためにはさまざまな知識が必要である。何かに取り組み始めたとき、とりあえず動員することができる知的ストックの量と質がその着想の展開可能性と比例してくる、という実感が私にはある。まずはそれ自体の興味のゆえに、そして一旦緩急のときに備えて、普段から蓄積しておいた〈雑学〉がなんとしても入用なのである。

第一に必要なのは語学力である。英独仏なんでもいいからとにかく原語で読んでみるのがスタートだ。夏休みはそのために使ってほしい。この点に関してはこの文章の最後に語学勉強についての古典を挙げておいた。

哲学史の教科書・通史

から始めよう。読書の要諦はなにか、特に教科書の選定の極意はなにか、といえば、exhaustiveness と simplification である。つまり、うんと詳しいのとうんと簡略なのを選ばねばならない。中途半端なのは結局なんの役にも立たない。

そのまえに、まず「読み物」から。『ドイツ古典哲学の本質』というタイトルで岩波文庫そのほかで翻訳されているハイネ（1797-1856）の紹介文は物語のように生き活きとした哲学史の小傑作だ。もとフランスの雑誌にフランス人向けにフランス語で発表したものだから、外国人向けにいろいろな事情が説明されている点がわたしたちにも参考になる。ハイネがパリで描いたドイツ事情紹介の諸文章はどれもおもしろい。さらに革命期の女傑スタール夫人（1766-1817）が亡命時代の見聞に基づいて書いた『ドイツ論』の宗教・哲学編は〈フランス人のドイツ哲学発見〉ともいべき感動を伝える啓蒙精神にあふれたルポルタージュだ（邦訳あり）。このジャンルでは、

さかのぼればヴォルテール『哲学書簡』もあげられよう（林達夫訳あり）。ハイネもスタール夫人もヴォルテールも、ジャーナリストとして超一流だった。

では本題に入ろう。哲学史の場合、詳しい代表は Überweg なのだが¹、これはむしろ事典のジャンルに属すると見たほうがいい。あくまでも教科書という範疇だと、慕わしいのはやはり Wilhelm Windelband-Heinz Heimsoeth, *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*, 1957（邦訳なし）だ。これは完成度も高い。たくさんついている脚注の内容、脚注の本文との呼応というような点から始まって、学問というものの流儀と雰囲気私たちに私たちを触れさせてくれる。あれは古いというようなコメントに耳を貸す必要は実はない。私たちにとっての学問は結局 19 世紀の産物なのだから。私の理想は本書が哲学史研究とのファースト・コンタクトの場所となることだ。増訂を担当した Heimsoeth が単著で書いている *Metaphysik der Neuzeit*, 1929 および *Die sechs grossen Themen der abendländischen Metaphysik*, 1921 は『近代の形而上学』および『近代哲学の精神』として翻訳されているので必読（ともに法政大学出版局）。

英語で Bertrand Russell (1872-1970) のベストセラー *A History of Western Philosophy*, 1945、や、新しく出た Anthony Kenny (1931-) の *A New History of Western Philosophy*, 2012 がある。Russell（無神論）のものは内容的にはそれほど深くないが、なにしろ文章が上手だ。おもしろい話題と気が利いたコメントに満ちている。Kenny（カトリックから不可知論者へ移行した）のは Russell にとって代わることを狙っていて、最新の研究とトピックが反映されているのが売りもの。Ernst Cassirer (1874-1945) の *Das Erkenntnisproblem*, 4 Bdn., 1906/1957 は近世哲学史概説として読むことが可能で、どんな教科書を読むよりも、これを読めば一気に各哲学者の心臓部に行きつくことができることを保証する。『認識問題』としてみすず書房より翻訳刊行中。フランス語の通史では Emile Bréhier (1876-1952) の *Histoire de la philosophie*, 2 tomes, 1929-1932 が内容文章ともに明晰かつ独自の高い見識を見せていて感服させられる。英訳もある。

これらに対して simplification の代表としていくつか挙げておく。まず、Johannes Hirschberger (1900-1990) の *Kleine Philosophiegeschichte*, 1961 (S.288 邦訳あり) がある。ドイツ語圏のスタンダードである親版 *Geschichte der Philosophie*, 1949-1952 (2 Bde. 邦訳あり) をコンデンスした新書版だ。要所は「暗記」しておいていいくらいである。ただしカトリックが立場で分析哲学系の記述はほとんどない。日本では、古めかしい点もあるが岩崎武雄 (1913-1976) の『西洋哲学史 再訂版』（初版 1952、再訂版 1975、有斐閣、および新地書房版著作集）はかつての定番入門書であり、よくこなれている。野田又夫 (1910-2004) の簡潔明晰な『西洋近世哲学史』は弘文堂アテネ文庫に起源を発する名著の一つ（初版 1950、ミネルヴァ書房からの増補改題版『西洋哲学史 ルネサンスから現代まで』1965、現在はちくま学芸文庫、2017）。

ちかごろイタリア語の読める人が増えてきているようなのは結構なことだが、ナポリを見て死

¹ 現在新版が出版されつつあるが、ますます「事典」「電話帳」の観を呈している。伊藤吉之助 (1885-1961) は元版を暗記していたという伝説を聞いたことがある。

ねと申し上げたい。たくさん出ている liceo classico 向けの教科書からいわばより取り見取りで選べるという特権と愉しみが彼らを待っているからだ。私がこのジャンルと出会ったのはもう 30 年以上前のことだが、わが初恋の人トリノの Vittorio Mathieu のものは幸い歳月を経て依然として座右のお気に入りのままだ (*Storia della filosofia*, 1968, 3 volumi)。著者はプロティノス、ライプニッツ、カント、ベルクソンそれぞれにすぐれた業績を持つ大型学者。かの国の高校教科書はこんなに高度でかつおもしろいのか、と眩暈がしたことを思いだす。イタリアでは哲学とは哲学史のことであり、この理念を支える守護神がジョヴァンニ・ジェンティーレ (1875-1944) である。そのころは、ミラノの Ludvico Geymonat (1908-1991)、同じくミラノの Mario Dal Pra (1914-1992)、トリノの Niccola Abbagnano (1901-1990) などの名だたる人たちはみんな一人の筆で古代から現代まで包摂した 3 巻本の通史を出していたものだ。さすがに現代では Giovanni Reale-Dario Antiseri, *Il pensiero occidentale* や Francesco Adorno-Tullio Gregory-Valerio Verra, *Storia della filosofia* のように分担執筆するのが普通だが、ローマの Franco Voltaggio (1934-) やヴェネツィアの Emanuele Severino (1928-)、ミラノの Carlo Sini (1933-) はいまでも単独執筆の孤墨を守っている。Mathieu はその後政治家? になってしまったが、Aldo Rizza の協力を得て上掲書をヴァージョン・アップした *Filosofia. Storia del pensiero e della civiltà*, 2000, 3 volumi を出している。こちらは、ますます詳細になって高校教科書からは脱皮した完全な教養書になっている。Ugo e Amaria Perone-Giovanni Ferretti-Claudio Ciancio, *Storia del Pensiero Filosofico*, 1983 は原典からの引用が多いし、文献案内が詳しくされていて便利だ。

哲学史の教科書・断代史と地域史

以上は通史であるが、断代史および地域史としていくつか挙げておこう。日本語では藤沢令夫「哲学の形成と確立—タレスからアリストテレスまで—」(『岩波講座哲学XVI 哲学の歴史I』)、山田晶「ソクラ哲学」(『講座哲学大系第2巻 哲学の歴史』、1963) がかつての大学院入試用定番だ。完成度が高く学問的にしっかりしているので今でも読むに値する。クラウス・リーゼンフーバー (1938-) の『西洋古代中世哲学史』(平凡社ライブラリー) は手堅く重厚。あまり知られていないが、Ernst Cassirer (1874-1945) の手になるギリシャ哲学史がある。Max Dessoir (Hrsg. von), *Lehrbuch der Philosophie*, Bd.2, *Die Geschichte der Philosophie*, 1925 (Nachdruck, 1986) という教科書のなかに収録されている *Die Philosophie der Griechen von den Anfängen bis Platon* (SS.7-139) がそれで、いつもながら見事にまとめられた作品だ。これは本来、上記の『認識問題』の一部をなすべく書かれたもので、完成度の高いマスターピースである。intermediate ではやはり「ソクラテス問題」への寄与で有名なスイスの大家 Olof Gigon (1912-1998) の *Grundprobleme der antiken Philosophie*, 1959 がある。中世哲学では Etienne Gilson (1884-1978) の *La philosophie au moyen-âge*, 2 tomes, 1922 が古典的な通史だが、ギフォード・レクチュアズに基づく *The Spirit of Medieval Philosophy*, 1932 (邦訳筑摩書房) も

ある。最新の研究状況に対応したのは Kurt Flasch (1930-) の *Das philosophische Denken im Mittelalter*, 2006 (レクラム文庫)、野心的に新しい中世哲学史像を提示するのはアラン・ド・リベラ (1948-) の『中世哲学史』(邦訳平凡社)。地域史としては、ドイツに関しては Lewis White Beck (1913-1997) の *Early German Philosophy*, 1969 (今のところ決定版)、フランスには Jean Wahl (1888-1974) の *Tableau de la philosophie française*, 1946, Louis Lavelle (1883-1951) の *La philosophie française entre les deux guerres*, 1942 および Jean Lacroix (1900-1986) の *Panorama de la philosophie française contemporaine*, 1968 (Wahl ののは通史、後の二者は断代史。三者ともコンパクトな名著)、イタリアは碩学 Eugenio Garin (1909-2004) の *Storia della filosofia italiana*, 3 volumi, 1966 (決定版、英訳もある) などがある。

思想史・アメリカ版

次にいまして視野を広げるために思想史に足を延ばすことにしよう。哲学史より取材範囲を広げた近世思想史としては、Jacob Bronowski (1908-1974) と Bruce Mazlish (1923-) 共著の *The Western Intellectual Tradition*, 1960 (邦訳『ヨーロッパの知的伝統』、みすず書房) の一読をまずすすめる。これは MIT での一般教育の講義がベースとなっていて、「教養」ということを強く意識したものである。大雑把に言うと、レオナルドからヘーゲルまで、つまりルネサンスから 19 世紀までを対象としている。文献に関しては annotation がついていてたいへん親切だ。また、古代から 19 世紀にわたる大河思想史 Will Durant (1885-1981) の *Story of the Civilization*, 11 vols., 1935-1975 は畢生の大作。巧みな構成と流麗な文章や数多くの図版で飽きさせない。政治・社会・思想・文学・芸術を一体化したアプローチに魅力を感じる人も多いだろう。古代東洋からナポレオンまでの一貫した「物語」として読むことができる (全巻邦訳および独訳あり)。

上記のものよりずっと教科書風に整理されているのが、宗教改革時代の専門家 Preserved Smith (1880-1941) の *A History of Modern Culture*, 2 vols., 1930/34 (2014 年に Cambridge U. P. より復刊)。歴史家の手になるもので盛り込まれた情報量が非常に多い。同じようにアメリカの大学生をターゲットにした著作としてはルネサンス期の科学史研究で有名な J. H. Randall Jr. (1899-1980) の *The Making of the Modern Mind*, 1926 も古典だ。Randall には *The Career of Philosophy*, 3 vols., 1967-75 という独自の見識に基づいたユニークな近現代哲学史もある (第 3 巻は「ダーウィン以後の哲学」と題されている)。またフランスからアメリカに渡った Jacques Barzun (1907-2012) の *From Dawn to Decadence*, 2000 は思想史研究の超ヴェテランが最晩年に書き下ろした、衰退史観ともいべき個性的な近世思想史。アメリカで生まれた新しいタイプの思想史としてラヴジョイ (1873-1962) に始まる history of idea 学派が重要だ。この学派はトピカルな取扱いが特徴で、古典中の古典であるラヴジョイの *The Great Chain of Being*, 1936 もタイトルに言うトピックの通史であって、ジャンル別の通史ではない (邦訳あり)。このグループでは唯一 George Boas (1891-1980) が *Dominant Themes in Modern Philosophy*, 1957 という教科書を書いている。ラヴジョイとともに、Marjorie Hope Nicolson (1894-1981) の *Newton*

Demands Muse, 1950 と *The Breaking of the Circle*, 1960 も英文学史と近世哲学史の両方にわたるクラシックだ。History of ideas 運動の集大成が *Dictionary of History of Ideas* (邦訳あり) としてまとめられている。新版も出ている。² 現代に、しかも社会思想に特化したものであるが、アメリカ発の思想史として20世紀の独仏を対象としたものだが、『シュペングラー』(1952)、『意識と社会』(1958)、『塞がれた道』(1968) などスチュアート・ヒューズ (1916-1999) の一連の著作もわすれられない。フレッシュでよく整理された観点がおもしろく、外から見た優位を生かしている (邦訳みすず書房)。現代哲学史としては、John Passmore (1914-2004) の *A Hundred Years of Philosophy*, 1966 は Oxford のローカルな事情が詳しく、特に注が情報量が多くて素晴らしい。これはイギリスに留学したオーストラリア人哲学者の手になるものだ。パスモアは *Recent Philosophers*, 1985 という続編も書いている。

思想史・ヨーロッパ版

次にいますこし視野を広げるために「思想史」という領域に足を延ばすことにしよう。帝国の都ウィーンという見晴台のメリットを活かして縦横無尽に論じたインターディシプリナリーなヨーロッパ思想史として、Friedrich Heer (1916-1983) の *Europäische Geistesgeschichte*, 1953 がすばらしい (短縮版の邦訳および英訳あり)。前項で記したものを讀んだあとでのアドバンスト・コースとして最適だろう。天才肌の著者が思いもかけないような思想のコンテクストを掘り起こしてみせたり、時間空間の隔たりを軽々と超えた思想の比較や類型化をやったのける名人芸が実にたのしく刺激的だ。続編もある (*Europa. Mutter der Revolutionen*, 1964)。同じくウィーンの文筆家の手になるものとしては、Egon Friedell (1878-1938) の *Kulturgeschichte der Neuzeit*, 1927/31 がある (邦訳みすず書房)。深くはないが才気煥発、Heer よりぐっと軽いタッチで黒死病から第一次大戦までの文化史が、美術・文学・政治・科学・哲学の文化全領域をめまぐるしく行き来しながら非常に生き生きと描き出されている。こういう俊敏でプリリアントな文章は読んでいて確かに快適だし、ドイツ語の読書力を養うために格好のものではないか、と感じるのだが、どうだろうか (1816 頁)。社会思想史という分野はマルクス主義と密着していたのでこの頃すっかり下火だが、かつての優れた成果まで忘れてしまうのはもったいない。「社会思想史」という日本固有のジャンルでは社会政策の大河内一男 (1905-1984) や社会哲学の淡野安太郎 (1902-1967) のものが代表的だが、Franz Borkenau (1900-1957) の *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild*, 1934 が古典だ (邦訳みすず書房)。実はこの人もウィーン生まれ。丸山真男がこれを応用して『日本政治思想史研究』の中心論文「近世日本政治思想における『自然』と『作為』—制度観の対立としての—」を書いたという因縁がある。読み比べて、どこをどう応用したのか考えたうえで丸山自身の回想で〈答え合わせ〉をして、ウーンと目を瞠

² 高山宏さんが伝えるところによると、由良君美 (1929-1990) さんのソースの一つがこの事典だったとのこと。由良君美『椿説泰西浪漫派文学談義』(原本 1972、平凡社ライブラリー版 2012、解説 pp.394f.) この事典にも新版が出ている。由良さんといえば、上記の本の冒頭の「すこしイギリス文学を面白いものに見よう」という一句が忘れられない。

るのもいい勉強になるだろう。邦訳が広く読まれた Karl Löwith (1897-1973) の *Von Hegel zu Nietzsche*, 1941 は社会科学にも強い著者の特徴が活かされた名著だ (三島憲一の新訳が岩波文庫に入った)。フランスには Georges Gusdorf (1912-2000) の *Les sciences humaines et la pensée occidentale*, 1963-88, 12 tomes という精神的な大河思想史がある。12 巻を費やしてロマン主義までで終わっている。かいま見ただけでも才気と深遠さを併せ持った筆であることはわかるが、分量ゆえに未読のまま。だれか読んでください！

分野は違うものの、フランス文学の通史である篠沢秀夫 (1933-2017) の『篠沢フランス文学講義』全 5 巻 (1979 - 2000) は、講義音源を起こしたという出自がもたらす楽しい雰囲気の中に本題以外のヨーロッパ文明やフランス社会のいろいろな基礎的事項を随所に盛り込んでいて (現地体験を踏まえたものが特におもしろい)、推薦したい著作である (大修館書店)。「19 世紀の首都」としてパリはウィーンの後継者だ。蓄積と準備を背景にした、こういう近世哲学史の講義をいつかできれば、と個人的にはうらやましく感じていた。とはいえ篠沢さんは 40 代でやっておられたのだから驚く。

ヨーロッパ精神論

さらに俯瞰的になると、現場であるヨーロッパでは思想史というよりも、「ヨーロッパ精神論」ともいべきジャンルがあり、サルヴァドル・デ・マダリアーガ (スペイン人、1886-1978) 『薔薇と十字架—ヨーロッパとはなにか—』、ルーイジ・バルジーニ (イタリア人、1908-1984) 『ヨーロッパ人』 (ともにみすず書房より翻訳あり)、ディエス・デル・コラル (スペイン人、1911-1998) 『ヨーロッパの略奪』 (未来社)、フリートリヒ・ヘール (オーストリア人) 『われらのヨーロッパ』 (法政大学出版局) などがおもしろい。それぞれの意味で自己解明のための格闘だ。トマス・マン (1875-1955) の『非政治的人間の考察』 (1918) はドイツ人に焦点が合わされているが重要。前記したレーヴィットの『ヨーロッパのニヒリズム』 (1940、邦訳未来社) もまた短編ながら「ヨーロッパ的文明は必要に応じて着たり脱いだりすることのできる着物ではなく、着た人の体のみならず魂までも変形せしむる気味悪い力をもったものである」と説く「日本の読者に与へる跋」の辛辣さとともに忘れられないこのジャンルの古典だ。ヴァレリー (1871-1945) の「方法的制覇」 (1897) および有名な講演「精神の危機」 (1919)、さらにオルテガ (1883-1955) の『大衆の反乱』 (1929) もこのジャンルに属するといえる (邦訳多数)。オルテガを含めスペイン人によって鋭利なヨーロッパ論が書かれているのは「ヨーロッパ近世の廃嫡された長子」のプライドだろうか。もうひとつ、ウラディミール・ソロヴィヨフ (1853-1900)、レフ・シェストフ (1866-1938)、ニコライ・ベルジャーエフ (1874-1948) などの、ロシアからの凝視もまた忘れてはならない。彼らはロシア正教という盤石の基盤を持っていて、そこからギリシャ哲学と出会って以後の二つの別のキリスト教と対峙している。モスクワが〈第 3 ローマ〉だというのがロシア正教会の立場だ。かれらの重厚さと深刻さはたしかにドストエフスキーと通底しているものが感じられる。カトリックとプロテスタントとを教義よりはライフ・スタイルとしてとら

えて比較する、という観点の著作もありそうで英独仏には意外になく、スペイン人が書いていた。Jose Luis Lopez Aranguren (1909-1996) の *Catolicismo y protestantismo como formas de existencia*, 1998 がそれだ (ちなみに本書初版のことは上記の Bronowski and Mazlish の脚注で知った)。カトリックといえば近世批判だが、鋭利なものとして、Jacques Maritain (1882-1973) の *Trois réformateurs*, 1925 がある (三人の改革者とはルター、デカルト、ルソーのこと。岩下壯一の訳がある)。イギリスの Christopher Dawson (1889-1970) の *The Making of Europe*, 1932 や *Religion and the Rise of Western Culture*, 1950 も、歴史書というよりむしろこのジャンルの文献だといっていいだろう。いっそう精神的だが、ロマーノ・グアルディーニ (1885-1968) の『近代の終末』(1950) も同断。「人国記」というべきカテゴリーでは、カザミアン (1877-1965、フランス人) 『イギリス魂』、ゼルディン (1933-、イギリス育ちのユダヤ系ロシア人) の『フランス人』、バルジーニの『イタリア人』、Max Lerner (1902-1992) の *America as Civilization*, 1956 などの古典がある (最後のもの以外はすべて翻訳あり)。日本には井筒俊彦 (1914-1993) に『ロシア的人間』(1953) という名著がある (文学が素材だ)。³ 辛辣な所見を忌憚なく述べきった津田左右吉 (1873-1961) の『支那思潮』(1929、全集第 28 巻所収) は見事だと思う。

日本人哲学者のものでは、イスタンブールでのハギア・ソフィア体験を印象深い導入部とした『聖堂・画廊・広場』(未来社、みすず書房の著作集にも収録)をはじめとする下村寅太郎 (1902-1995) の諸著のほか、坂部恵 (1936-2009) の『ヨーロッパ精神入門』(岩波書店) もセンスよくまとめられている。歴史家では、托鉢修道会フランシスコ会の登場を一つの山場にした堀米庸三 (1913-1975) の『正統と異端—ヨーロッパ精神の底流』(1964、中公新書)、古代と中世との文化断絶・連続の論争を切り口にした増田四郎 (1908-1997) の『ヨーロッパとはなにか』(1967、岩波新書) のほか、木村尚三郎 (1930-2006) の『歴史の発見—新しい世界史像の提唱』(1968、中公新書) がおもしろい。樺山紘一の『西洋学事始』(中公文庫) は珍しいトピックの基礎知識。文学者のものはきりがないので省略するほかないが、吉田健一『ヨオロッパの世紀末』(1970) は 18 世紀と 19 世紀との対比を極大化するという手法を取っており、この点で哲学史の背景ともかかわっている。19 世紀のヨーロッパをヨーロッパそのものと誤認しないために私たち近世哲学専攻者にも有用だ。あくまで体験に密着した立論として若き日の西尾幹二による『ヨーロッパの個人主義—人は自由という思想に耐えられるか』(1969、講談社現代新書) と『ヨーロッパ像の転換』(1969、新潮社) が初々しく気合いがかかっている。「はじめに憧れがあった」を序章として、より留学体験記に近づいたフランス文学の阿部良雄『若いヨーロッパ』(中公文庫) も最終章は「ヨーロッパから何を学ぶべきか」だ (留学先はエコール・ノルマル)。八木雄二『中世哲学への招待—「ヨーロッパ的思考」のはじまりを知るために』(平凡社新書) は正攻法の好著。ふと思うが、そろそろ「アジアは一つではない」と喝破した津田左右吉『支那思想と日

³ 井筒さんの著作ではほかに『神秘哲学』が哲学史研究者にとってはおもしろい。西谷啓治の『神秘思想史』と比較することは応用問題として有益だろう。哲学史としての正統性は井筒のほうにあるが、パラダイムとなったのは西谷のほうである。この理由はどこにあるのか？

本』(1937)のような冷徹な視線を西洋思想と西洋社会に対しても注ぐものが現れてもいいのではないだろうか。前記の吉田健一『ヨオロッパの世紀末』はある点でこれを目指していたといえるし、学問的にかなり深刻冷厳なヨーロッパ像を示した木村尚三郎の『近代の神話—新ヨーロッパ像』(1975,中公新書)はこの期待に応ずるものだった。現代思想史という舞台では『昨日の旅』(1977)、『現代史の旅』(1983)というヨーロッパおよび南米紀行を書いた清水幾太郎(1907-1988)がそれをなし得たかもしれない人物だが、いまは『現代思想』(1966、岩波)と『倫理学ノート』(1972、講談社学術文庫)で彼の胸奥にあったものの片鱗をうかがうほかはない。⁴

ヨーロッパ近世の歴史

哲学史は一面において歴史なのであるから、ヨーロッパ近世の歴史そのものについても見通しあるいは土地勘を養っておいたほうがよい。世界史とかヨーロッパ史とかいうジャンルはこのごろどうもイギリス人の独壇場で、定番となっている J. M. Roberts (1928-2003) の *The New History of the World*, 6th ed., 2013 をはじめ、Norman Davies (1939-) の *Europe. A History*, 1996 や Brendan Simms (1969-) の *Europe*, 2013 など続々と新しいものが出ている。そもそも19世紀では歴史学特に *Weltgeschichte* (世界史) はドイツ人の得意な領域だったはずである (Ranke といえば *Weltgeschichte* だったわけだが、このコンセプトの最後を飾るのは *Propyläen Weltgeschichte*, 10 Bdn, 1930-33 だろうか?)。むかしはイギリスでは自国史のほかは一般教養レベルのものがむしろ目立っていた。Oscar Browning (1837-1923) の *A General History of the World*, 1913 あたりはその代表的なものだ。大規模な〈世界史大系〉というジャンルがアカデミズムから消滅するに至って、かえってイギリス流の視野が生き残ったということもあるのかもしれない。新しくはないが断代史としては、18世紀を対象とした、David Ogg (1887-1965) の *Europe of the Ancien Regime 1715-1783*, 1965 (邦訳なし) は、私のおすすめ。タイトルに言う「アンシャン・レジーム」とはもちろんフランス革命以前の社会を意味するが、本書でオグは、ヒュームについて、プーフENDORF について、ルソーについて、決して思想が現実から遊離することをゆるさずに、大事だが哲学史の教科書では省略されがちな基礎的事項をあれこれと教えてくれる。哲学者クロウチエ (1866-1952) の *Storia d'Europa nel secolo decimonono*, 1932 は全欧に目配りを利かせた誠に気宇壮大な書で、歴史学者の書いた歴史とはまったく違うピクチャーを見せてくれる (邦訳『19世紀ヨーロッパ史』、創文社)。味読に値する書だ。ソ連と東欧の崩壊を踏まえた歴史的把握はまだ定まったものがないようだが、上記 Norman Davies は東欧にウェイトをかけたヨーロッパ史の新しい見方を出している。

各国史では、イギリス史として G.M. トレヴェリアン (1876-1962) の『イギリス史』はホイッ

⁴ 歴史書あるいは歴史記述に関する私の考えの一端を「テキストからの展望」(岩波講座哲学第14巻『哲学史の哲学』、2009 所収の拙稿「哲学史という発明」コラム)で、アドリアーノ・プロスペリ、ランブロス・クルバリツィス、西谷啓治、三宅剛一、丸山真男の著作に触れながら論じておいた。私が講筵に列し言葉を交わす機会を持ったのはプロスペリだけであるが、かれらの書物が私の眼を開いてくれたことに感謝している。

グの名門の出のこの人らしい巨視的な観察が随所にちりばめられていてワクワクする（邦訳みすず書房）。近刊書では Robert Tombs, *The English and Their History*, 2014 は才気煥発で情報を詰め込んである。イギリス史のポイントは 17 世紀であると思う。この興味尽きない時代のグラスルーツの思想史として Christopher Hill, *The World turned Upside Down*, 1975 がおもしろい。フランス史ではリーダーなピエール・ガクソット（1895-1982）の『フランス人の歴史』（邦訳みすず書房）や作家 André Maurois（1885-1967）の *Histoire de la France*, 1947（邦訳新潮文庫）のほかに、コンパクトで明晰そのものの Malet et Isaac の名教科書がある（現在では全 4 巻のペーパーバックになっている）。20 世紀の初めに初版が出たこのマニュアルが改定補筆を重ねて今でも読まれているのは驚きだ。これはもともとが暗記の対象。フランス史というと、やはり 17 世紀の哲学者たちの舞台であるアンシャン・レジームの社会とカントおよびドイツ観念論の前提である革命史に関する知識が哲学史との関係でも欠かせないが、無数に書物がある領域だから省略するほかない。Alfred Cobban（1901-1968）の *Aspects of the French Revolution*, 1968 は研究史のサーベイを含んでいて非常に参考になる。⁵ 現代フランス論ともいべきジャンルでは第 5 共和制で閣僚を歴任したアラン・ペールフィットの *Le mal français*, 1976（邦訳『フランス病』）が圧巻。⁶

ドイツ史というのはおそらくとらえどころのない対象なのかもしれない。Hagen Schulze（1943-2014）の *Gibt es überhaupt eine deutsche Geschichte?*, 1989 はドイツ史に照らして「伝統の創造」を明らかにしたものだ。ある点で「ドイツ」は現実ではなくむしろ理念である。だから想像力あるいは構想力が脊椎として働かなければドイツ史は見えてこない。グスタフ・フライターク（1816-1895）: *Bilder aus der deutschen Vergangenheit*, 1867、エーミール・ルートヴィヒ（1881-1948）: *Geschichte der Deutschen*, 2 Bdn, 1945、リカルダ・フーフ（1864-1947）: *Deutsche Geschichte*, 1934-1949 というように作家たちがドイツ史に挑んできたのもそういう事情の一端なのかもしれない。Hans Pleticha (Hrsg.von), *Deutsche Geschichte in 12 Bänden*, 1984 はカラー図版入りの一般向き通史。⁷ 一冊本の新しく簡便な通史では Broockmann-Schilling-Schulze-Stürzer, *Mitten in Europa*, 1999 があり、英語で書かれた通史では Hajo Holborn（1902-1969）の *A History of Germany*, 3 vols, 1959-1969 がながらく定番。カント以降の時期を扱ったものでは James J. Sheehan（1937-）の *German History 1770-1866*, 1989 が詳しくてトリヴィア情報の宝庫だ（邦訳なし）。さらに狭くなるがプロイセン史はカントとベルリン大学の存在のゆえに気になるところである。Christopher Clarke（1960-）の *Iron Kingdom*.

⁵ 作家によるフランス史もある。なにより、Alexandre Dumas père（1802-1870）が一連の作品でフランス史をフォローしている。ちなみに Dumas père はラファエル・フォン・ケーベル（1848-1923）のお気に入りの作家だった。またフランス革命史としては Louis Blanc（1811-1882）のが面白そうだ。

⁶ ノルマリアンのペールフィットが「先生」としてあげる人物は、バシュラール、マルセル、ル・サンヌと哲学者ばかりである。

⁷ 実はイギリスの文筆家たちもイギリス史を書く伝統があるようだ。歴史家としてのほうが同時代には有名だった Hume（1711-1776）は別格としても、Tobias Smolett（1721-1771）や大作家 Charles Dickens（1812-1870）もカトリックの G. K. Chesterton（1874-1936）も、近頃では Peter Acroyd（1949-）なども、リーダーな自国史を書いている。

The Rise and Downfall of Prussia 1600-1947, 2006 はエピソードも数多く組み込んでいて抜群にリーダブル。カントも登場してきて、なるほどと思わせるコメントが加えられている。どうもドイツ史でさえアングロ・サクソンの、とくにイギリスの、学者たちがおもしろい観点を出示してくるのはどうしてなのだろうか。ドイツは内部からよりもむしろ距離をとってあるいは外から大観してはじめてくつきりと見えてくるということかもしれない。もう一つ、ドイツと外延的には重なるものの私たちにはなんともわかりにくい謎の国家「神聖ローマ帝国」については、Peter H. Wilson の *The Holy Roman Empire*, 2016 が出た。ヴォルテールと一緒にあって嘲笑してばかりもいられないようだ。前記のガクソットはドイツびいき（アクション・フランセーズ！）でいいドイツ史やフリードリッヒ大王伝がある。

レファランス

レファランスではまず、*The Encyclopedia of Philosophy*, 1967, 8 vols. を挙げておきたい。1960年代というのはこの種の大規模な出版物のピークを成した時代であり、本書も規模といいレベルといい、その後の Routledge によっても乗り越えられてはいない。アメリカで発達したレキシコグラフィーという学問の観点が全体に浸透していて、リーダビリティの観点もよく考慮されている（ドイツの *Historisches Wörterbuch der Philosophie* にはない観点だ）。私は学生時代に本書の縮刷 4 巻本を購入して枕頭の書としていたけれど、わが「雑学」にとっては完璧な出発点だったと思う。⁸ その後 30 数年を経て本も内容もさすがに古くなったが、今でも愛用している（本書の second edition を称するものも出版されている。新しい項目を増補し、文献目録もアップデートされているが、残念ながら原本には及ばない出来だった）。ビブリオグラフィーがなかなかわしくて、annotation もついているケースが多いのがありがたい。これで研究史への展望が自然に身につくという仕掛けだ。本書は数多くの執筆者が分担して Paul Edwards が総編集長を務めたものだが、これに匹敵する規模とレベルで個人執筆という驚くべきものがある。José Ferrater Mora, *Diccionario de la filosofía*, 1979, 4 vols がそれだ。スペイン語圏では定番であり、editio minor も出されている。スペインというと、Xavier Zubiri Apalategui (1898-1983)、Juan David Garcia Bacca (1901-1992)、Pedro Lain Entralgo (1908-2001) とスケールの大きな文理融合型哲学者たちが思い浮かぶが、その最後に連なるのが著者のフェラテール・モーラ (1912-1991) だろう。一巻本だが同じく個人執筆の哲学辞典としてイタリアには Niccola Abbagnano (1901-1990) のものがある (*Dizionario di filosofia*, 1971)。英語では Oxford と Cambridge の一冊本哲学辞典があるが、*The Penguin Dictionary of Philosophy* (Thomas Mauthner ed.), 1996 はちょっと面白い企画をしている。現代哲学者に関する項目を本人に書かせているのだ (Armstrong, Rorty etc.)。ネットで公開されている *Stanford Encyclopedia of Philosophy* は現在進行形だが、分野によっては最新の研究状況と文献とをチェックすることがで

⁸ 雑学だけではないことも付記しておく。この事典には当時 CUNY の Binghamton にいた Giorgio Tonelli がマイナーなドイツ哲学者の項目をたくさん執筆している。これが aetas kantiana とイタリアの学会への関心の始まりとなったので、個人的にも忘れられない出会いである。

きるので便利。

ユニークなのはフランスの André Lalande (1867-1963), *Vocabulaire critique de la philosophie*, 1926。これはフランス的な整理と明晰への情熱の産物で、各項目を回覧したうえで寄せられたコメントを脚中に組み入れている。ここにはフランス人だけではなく、ラッセルをはじめ外国人も登場していて、さながらベル・エポックの哲学者たちの上品な交際の雰囲気まで味わえるというおまけつきだ(ペーパーバック 2 冊になって現役)。古代関係は古典学としてのまとまりと蓄積があるためか、レファレンスもいろいろとあるし、そこには哲学関係の記事・項目は必ず含まれている。スイスの *Lexikon der Alten Welt*, 3 Bde. (Artemis Verlag) には哲学関係を受け持つ Olof Gigon (1912-1998) をはじめ独仏の碩学が目白押しで壮観。乾燥圧縮された叙述を「もどす」作業が必要であるがそれに値する本だ。Sir Paul Harvey (1869-1948) の古い *Oxford Companion to Classical Literature*, 1937 は田中美知太郎さんのおすすめ本。⁹ 私たちの学生時代には上記の *Lexikon der Alten Welt* から抜き出した editio minor が、*Lexikon der Antike* というタイトルでペーパーバック専門の dtv から出ていて安くてありがたかった(1 ドル 360 円、1 ポンド 1008 円の固定相場時代である!)。あと、もちろん *Oxford Classical Dictionary* の第 2 版(1970) および第 3 版(1996) も忘れてはならない。二つの版を比べることは知識だけでなく古典学という学問のこのところの変貌を目の当たりにすることでもある。ただ注意すべきは、英語で classical といったときには、時代が同じであってもキリスト教関係は一切含んでいないということであり、この点でときに不便を感じる時がある。こちらの目的のためには *Encyclopedia of Early Christianity*, 1998 あたりを見るほかない。これに反して前記の *Lexikon der Alten Welt* は古代に属する限りでのキリスト教関係の項目も含んでいる。中世史関係のレファレンスとしては、新しくは、大規模な *Dictionary of the Middle Ages*, 13 vols, 1982-1989 および Artemis Verlag の *Lexikon des Mittelalters*, 9 Bdn, 1980-1998、のほか André Vauchez (sous la direction de), *Dictionnaire encyclopédique du moyen âge*, 1997 がある。ハンディながら情報豊かな Claude Gauvard-Alan de Libera-Michel Zink, *Dictionnaire du Moyen Age*, 2002 も出ている。もちろん新旧の事典を見比べることで中世研究における最近の変貌や関心の変化を知ることができるのは古代と同じだ。「現代用語」に関しては、Raymond Williams (1912-1988) の *Keywords*, 1976 がシャープで簡便。

一般事典に関しては今や Wikipedia で間に合うことが多いのかもしれないが、信頼性の点でやはり机上のも必要だ。Quick reference のためには一冊ものが便利だが、*The Columbia Encyclopedia* が版を重ねていて内容も充実している(6th Edition, 2000)。英米本位の偏りは不可避だが、この点はフランスならラルース、イタリアならザニケッリの一冊本で補完することができる。これに反してドイツはむしろ大規模な百科事典のほうで実力を発揮しているようだ(ブロックハウスやヘルダー、マイヤーなど)。ただしドイツの百科事典は小項目主義であり、署名

⁹ 田中・松平の『ギリシャ語入門 改訂版』(1962)の「参考書目」に「小型であるがきわめて巧妙に編纂しており、単に必要に応じて参考するのみならず、平常随時に拾い読みしても面白く有益な辞典である。」(262頁)とある。

入りの大項目はない。

大百科事典というと *Encyclopaedia Britannica* を外すわけにはゆかない。もともとは一項目が一冊の本になるくらいの分量を持っていたものだ。今では画像で見られる有名な *eleventh edition* をはじめ、著作権がアメリカに移った後も 1960 年代まではなんとか伝統的なスタイルが守られ、その時代には、哲学関係の項目は有名学者が署名入りで執筆していて読み応えがあった。『恋愛双曲線』や『すばらしい新世界』の作家オルダス・ハクスレー (1894-1963) は全巻を何べんか通読したということだ。かつての版では現象学の項目をフッサールとハイデガーが相談して寄稿していたことはあまりにも著名だし、クローチェは *Aesthetics* の項目を寄せていた。¹⁰ 知識のためだけでなく、*random browsing* をしていてユニークな観点を打ち出す論客に出会ったり、話し上手な執筆者の手になる項目にすっかり魅惑されたりするのがこの種の大型百科事典を読む楽しみ。

ついでながら、インターネット上の画像で *La grande encyclopedie*, 31 tomes, 1886-1902 が公開されている。Larousse ほど有名ではないが、やはり 19 世紀フランスの学術の総力を結集した伝説の大項目主義の事典であり、哲学・古典学関係が今から見るとアンバランスなくらい重視されている。ということは、私たちには大いにありがたいわけだ。ダブルコラムで第 3 巻の pp.933-954 にわたるアリストテレスの項目、第 21 巻の pp.403-420 にわたるカントの項目はともにエミール・ブトルー (1845-1921) が書いている。ジョルジュ・ロディエ (1864-1913) 執筆のプロテュノスの項目は彼の論文集にも採録されている。また、*The Century Dictionary* は性格としては語学辞典だが、哲学および論理学関係の語彙を C.S.パース (1839-1914) が担当していて評価が高い。ときに参照する価値がある。これも今では画像化されている。日本の百科事典ではほぼ同時に出た二点、『日本大百科全書』(1984-1989、小学館)と『世界大百科事典』(1988、平凡社)とが、当面、あるいは最後の大規模な事典企画になってしまっている。前者はカラー図版も多いし、個性的な多くの大項目(特に東洋史関係)を含んでいて愉しく読みごたえがある(宮崎市定さんがたくさんの項目を寄稿している)。後者は 2007 年に改訂版が出され、2014 年には電子辞書に搭載された最初の大百科事典となった。

「研究の方法」・文献目録

「研究の方法」に関しては、Jacques Barzun, *The Modern Researcher*, 2003 (orig. 1957) が古典。すでに触れたが 著者は仏独英に渡る近世思想史の専門家で、思想と歴史とのほざまで研究

¹⁰ 手元の 1960 年代版では *phenomenology* の項目担当は J.N.フィンドレー (1903-1987) に代わっているが、*logic* はアロンゾ・チャーチ (1903-1995)、*category* と *metaphysics* と *ontology* はギルバート・ライル (1900-1976)、*truth* はジョフリー・ウォーノック (1923-1995)、*christianity* と *mysticism* はヤロスラフ・ペリカン (1923-2006)、*chinese philosophy* は陳榮捷 (1901-1994)、*indian philosophy* はラーダークリシュナン (1888-1975)、*myth* はエリアーデ (1907-1986)、*Plato* と *Socrates* は A.E.テイラー (1869-1945)、*sophists* はヘンリー・ジャクソン (1839-1921)、*socialism* は G.D.H.コール (1889-1959) とバーナード・ショウ (1856-1950)、*cosmogony* はジョージ・ガモフ (1904-1968)、*set theory* は A.A.フレンケル (1891-1965)、*space-time* はアインシュタイン (1879-1955)、*geometry* はハンス・フロイデンタール (1905-1990) という具合にやはり豪華な執筆陣を揃えている。

するものためのいろいろなテクニックやヒント、助言が含まれている。調べものが好きな人には、取材が文学史にしぼられるが、Robert Altick, *The Art of Literary Research*, 1992 (orig. 1963) が興味津々だろう。一種の探偵術であるから。

文献目録としては、古いものに関しては Gilbert Varet, *Manuel de bibliographie philosophique. 1 Les philosophies classiques*, 1956 が網羅的で書誌データも正確で便利だ。Gregor Sebba の *Bibliographia cartesiana*, 1964 は個別哲学者に関するビブリオグラフィーの模範といえるだろう。網羅的な上きちんと評価が示されている。ドイツには辞典の形式で、解説ではなくそのタイトルに関する参考文献が列挙してあるというものがあつたが (*Herders Bücherlexikon*)、哲学に特化したのが欲しいところだ。日本語では下村寅太郎・淡野安太郎編『哲学研究入門』(1955、河出書房からの分冊復刊あり)の時代別・地域別・分野別の各章。刊行時が古いのでだいたいは戦前の文献の紹介だが、田中美知太郎(アリストテレスまでの古代哲学)、高田三郎(アリストテレス以後の古代哲学)、服部英次郎(中世哲学)、三宅剛一(ドイツ哲学)、西谷啓治(宗教哲学)などの名だたる読書家かつ蔵書家が執筆している章はきわめて詳細。一冊一冊の文献に対する彼らの評価が明示されており、いわば彼らの書齋で指導を受けている気がする。*Répertoire bibliographique de Louvain* が毎年行う文献目録は時代別で並べられ、著者別の索引がついているのできわめて便利だ(書庫にあり、バックナンバーはオンラインで見られる)。

そのほか、bibliographical essay というジャンルがある。フォーマルな文献目録ではなく自由なコメントを交えつつおもしろいと判定し推奨したいものを紹介し、ときに筆誅を加える技を競うジャンルだ。このジャンルの名手としては、思想史の Peter Gay (1923-) ¹¹、アメリカ史の Daniel Boorstin (1914-2004) ¹²、ドイツにおけるフランス文化研究の泰斗 Ernst Robert Curtius (1886-1956) ¹³、イタリアからイギリスに移った古代史学者の Arnaldo Momigliano (1908-1987) ¹⁴ やアメリカからイギリスに移った古代史の Moses Finley (1912-1986) ¹⁵、アメリカ人の中世史研究者 Norman Cantor (1929-2004) ¹⁶、ルネサンス研究で知られたイタリアの Federico Chabod (1901-1960) ¹⁷ などなど、各国にいる。¹⁸ Momigliano のものを読めば研究史

¹¹ ほぼすべての著作に bibliographical essay がついている。翻訳があるものでは『自由の科学』

¹² 翻訳があるものでは『イメージ』1961

¹³ *Büchertagebuch*, 『読書日記』(邦訳みすず書房)

¹⁴ *Essays on ancient and modern historiography*, 1977. そのほか、ローマの *Storia e Letteratura* から *Contributo* と名付けられた Momigliano の論集が 8 巻まで出ているが、そのほとんどは bibliographical essay だと言ってもいい。

¹⁵ *Aspect of Antiquity*, 1968

¹⁶ *Inventing the Middle Ages*, 1991

¹⁷ *Machiavelli and the Renaissance*, 1958 に英訳が収められている。

¹⁸ 日本では『アジア歴史研究入門』(全5巻、1983)に収録された各篇、特に島田虔次(中国思想史、1917-2000)や日原利国(中国哲学史、1927-1984)のものがこれらに匹敵する充実度に達している(島田は第1巻および第3巻、日原は第3巻所収)。ともに自分の研究生活の回顧を含んでいて味わいが尽きない。およびもつかないとはいえ本稿を執筆するにあたっていつも念頭にあつたのはお二人の文章である。

のサーヴェイとともに、よそでは見られない・原則的にきわめて手厳しい評価を知ることができる。¹⁹ 史学関係にしぼられるが、G. P. Gooch, *History and Historians in the Nineteenth Century*, 1959 (邦訳あり) も実質的にはこの役割を果たしている。哲学史関係だと、範囲はカントまでのドイツ哲学史に限られているが、上掲した Lewis White Beck, *Early German Philosophy*, 1969 の An Informal Bibliography がこれに近い充実を示す。また (一次) 文献事典というか、解題事典という性格のものも出ている: Franco Volpi, *Grosses Werklexikon der Philosophie*, 2 Bde, 1999 (これは文閲開架にある)。もっと取材範囲を広げたものには、Bompiani-Laffont, *Dictionnaire des oeuvres de tous les temps et de tous les pays*, 4 tomes, 1952 がある。日本語では『世界名著大事典』全 8 巻 (1960, 平凡社) がこれに相当し、刊行時点での代表的研究者たちが古典の解題を担当している (たとえば『存在と時間』は原佑、『先験的観念論の体系』は西谷啓治、『資本論』は遊部久蔵、『種の起原』は八杉龍一、『万葉集』は五味智英、『源氏物語』は阿部秋生が、それぞれ詳しい解題を書いている)。

補足 13 則

1 白水社の《クセジュ》文庫の哲学・思想・宗教・歴史系は総じて非常にレベルが高い。古本屋等で見かけたら入手しておくといよい。カント (ラクロワ)、スピノザ (ジョセフ・モロー)、デカルト (ロディス=レヴィス)、ルネサンス哲学 (ヴェドリーヌ)、東方正教会 (クレマン)、アジア史 (グルッセ)、新約聖書 (クルマン)、啓蒙時代 (メチヴィエ)、種の起源 (ギエノー)、和声の歴史 (アラン)、舞踏と音楽 (マシャベ) など、いつまでも手放せない名著揃いだ。今も次々と出版されているのでフランス語の読める人は原本で! どんなテーマでも原本でいうとあっさり 128 頁に圧縮してあるので、かつてはものすごい詰め込み感があつてそれがまた味わいになっていた。現役で新書形態のものでは Oxford の Very Short Introduction シリーズで哲学の各テーマの最新の知見が求められることは言うまでもない。文学部英語のテキストにもしばしば使われている。

2 古本では戦前 (西の岩波) といわれた弘文堂の「西哲叢書」。ここに入っているものは同じテーマの現代のものに比べて、1 レベルが高い 2 わかりやすい 3 文章がいい の三点のうち少なくとも一つにおいては優っている。なかでも、カント (高坂正顕)、ライプニッツ (下村寅太郎)、デカルト (野田又夫) などは著作集に入っていたり、単行本化されたりしている名著だ。コーヘン (佐藤省三)、シェーラー (田中熙) はほかに類書がない。そのほか、巻末の近刊予告で、アリストテレス (高田三郎)、ベルクソン (西谷啓治)、コント (梯明秀) などついに出なかつた幻の名著たちを眺め、出なかつた理由に思いをめぐらせるのもささやかな日本哲学史研究だろう。このようなシリーズの戦後版としては勁草書房「思想学説全書」、講談社「人類の知的遺産」があり、それぞれいいものが含まれている (ともに絶版)。清水書院の「人と学説シリーズ」

¹⁹ なお、ここで挙げたものの多くがもとと掲載された場所である、New York Times Book Review, Times Literary Supplement, London Review of Books といったものを見る必要がある。現在ではインターネットで相当カバーすることができる。

は元来高校生向けのコンセプトだが、なかには、特に近年刊行の分には、ハイ・レベルのものもあるので要注意。文庫版サイズのシリーズで哲学関係をたくさん含んでいるものは、外国ではクセジュのほか、戦前にはドイツ (Götschen) にもフランス (Payot) にもクセジュよりもう少しだけ多いページ数のがいろいろとあったし、たいへんいいものが入っていた。

3 外国文を読む場合にはもちろん辞書が必要だ。近年は電子辞書という道具も現れているし、一概に否定はしない。ないよりはずっとましだ。しかしもちろん大事な辞書がすべて電子辞書化されているわけではないし、入っている辞書もその全内容が収録されているわけではない。fixed menu に満足しないで書籍形態の辞書の世界を探り、活用法をマスターしたほうがよい。辞書というものは万能であることはできない。そもそも近世哲学史専修では演習のテキスト原文を読む場合とその研究書や注釈書を読む場合では要求される辞書が異なってくるという事情がある。それぞれの辞書の特色をよく認識して使い分けることが必要だ。たとえば古い語法や語義は独和辞典でもやはり『木村・相良独和辞典』(新訂版 1963、高機能な定番独和の随一)をはじめとする古いものにしか記載されていない。逆に新聞雑誌などの現代ドイツ文を読むためには木村・相良では間に合わない。また小学館『独和大辞典』(第2版、2000)など最近の辞典では語源記述は省略されることが多いが、われわれにとってはあったほうがなにかと便利だし、ないと何となくさびしい。木村・相良には語源記述があるが、この点では佐藤通次(1901-1990)の『独和言林』(1961)および『岩波独和辞典 増補版』(1971)の語源記述が楽しい豆知識の宝庫だ。大きな辞書が作られるとそれから派生した簡略版が現れるのは普通のことだが、佐藤通次の仕事を『独和言林』『岩波独和辞典』『小独和辞典』とたどるのは長澤規矩也(1902-1980)の漢和辞典の系譜をたどると同じように勉強になることである。辞書にとっては掌に載る大きさ重さも大事な属性だ。倉石五郎(1899-1976)の『コンサイス独和辞典』(第5版、1978)はカバンに入れて持ち歩けるうえ、倉石さん執筆の項目(不変化詞、語法の助動詞、不定数詞)の、特にすべて自分で集めたと序文でいわれる用例はたしかに大辞典を凌いでいるお徳用本だ。佐藤通次といい倉石五郎といい、一人が作ったあるいは隅々まで目を行き届かせた辞書には最近の辞書には求められない職人仕事の味わいがあると思う。古本屋や古本市で安く見つけたら買っておいでもよいだろう。普通の辞典では紙幅を割けない相違を詳しく説明しているのが小島尚『ドイツ語同意語小辞典』(1961)。現代ドイツ語語彙の収録、および新鮮な訳語という点では、ロベルト・シンチンガー(1898-1988)ほかの『独和広辞典』(1986)あるいは『新現代独和辞典』(1992)がいい。独和は *Duden Deutsches Universal Wörterbuch*, 1986 が画期的だが、私は Gerhard Wahrig, *Wörterbuch der deutschen Sprache*, 1978 も携帯用に愛用している。関口存男(1894-1958)の各参考書・研究書は深遠で熟読玩味が必要な「一生もの」だ。英和辞典や仏和辞典に関してはいろいろなガイドがあるのでここで触れる必要はないだろう。仏和辞典は Robert の各段階・各目的用の辞書でたいへん間に合う。英英に関しては、定評ある *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 2015 (これの原型である A. S. Hornby の *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*, 1941 は特に日本人向けに作られたものだった)、あるいはもっと

エレメンタリーな *Cambridge Learner's Dictionary*, 1995 を備えておくことを薦める。英語で書くときにきわめて便利だ。世界最高の辞典というべき *Oxford English Dictionary* が天眼鏡つき縮刷版、CD-ROM 版など各種の形態で簡単にアクセスできるのは隔世の感がある。

4 日本のことは何も知らないねといわれたくないなら、内藤湖南 (1866-1934) と津田左右吉 (1873-1961) の味読をおすすめする。湖南の『日本文化史研究』(講談社学術文庫)『先哲の学問』(筑摩叢書)と津田の『文学に現れたるわが国民思想の研究』(岩波文庫)を併せ読むと実にインスパイアされる。あと、定番の丸山真男 (1914-1996) の『日本の思想』(岩波新書、独訳 *Denken in Japan* あり)のほか、伊藤整 (1905-1969) の『近代日本人の発想の諸形式』も必読(『小説の認識』所収、岩波文庫)。体得するには時間がかかるが折口信夫 (1887-1953) のものも魅力がある(『折口信夫全集 ノート篇』全 18 巻を薦める)。山本健吉 (1907-1988) の『いのちとかたち』(1981) は折口門下の日本文化論として代表的だ(角川文庫)。それにしても手ごろで、そして手ごたえのある日本の通史をなかなか思いつかないことに愕然とする。日本史であるゆえに、日本人が自国の歴史をどう理解したか、その結果という味わいを求めたくなるのだ。もしかすると、伊達千広 (1802-1877) の『大勢三転考』(1873) あたりを踏まえて竹腰与三郎 (1865-1950) の『二千五百年史』(1896)、山路愛山 (1865-1917) の『日本人民史』(一部のみ完成、岩波文庫『基督教評論・日本人民史』所収)、吉田東伍 (1864-1918) の『倒叙日本史』全 10 巻プラス索引 1 巻 (1913-14) までさかのぼらなければならないのだろうか。吉田東伍のものは大量の史料を引用しているだけではなく、項目ごとに史評をふんだんに引用することで行文がポリフォニックな懐の深さを与えられているし、『大日本地名辞書』の著者らしく一種の土地勘をもって歴史を語っている点が他書に類がない手ごたえ感をもたらしている。これは明治から逆向きに太古に遡るという「倒叙」形式の成否・賛否とはべつに本書の魅力だ。徳富蘇峰 (1863-1957) の畢生の大著『近世日本国民史』(全 100 巻、1913-1952) は大量の資料引用で得るところ多いが、史観としての透徹はあまり感じない。

5 仏教関係では宇井伯寿 (1882-1963) の『仏教汎論』(1947) に止めを刺す。ひと夏かかるがこれをマスターすれば仏教についても必要な知識と多少の見通しが得られる。教義の説明も詳しく論理的で辞典代わりにもなる。三島由紀夫 (1925-1970) も武田泰淳 (1912-1976) も本書で勉強して小説を書いたのである(二人の対談に出てくる)。上山春平・梅原猛編の『日本の仏教』全 10 巻 (1967 から 1970) は哲学の話題も多いし、わかりやすい(角川文庫になっている)。上山梅原両氏が文庫化 (1996) にあたってその後の思索を序文に示されている持続力には頭が下がる。大蔵出版の仏典講座シリーズは経論の解説として学問的で便利だ(平川彰『八宗綱要』(上)(下)、同じく平川彰『大乘起信論』、鎌田茂雄『華嚴五経章』など)。日本の哲学者が活用することの多い『大乘起信論』、『華嚴五経章』や『正法眼蔵』、『教行信証』は昔から多くの注釈を持っている。『歎異抄』には梅原さんの校註版があった(講談社文庫、なお梅原猛の仏教関係論文は著作集に『仏教の思想』として 2 巻で収録されている)。明治のものだが井上円了 (1858-1919) の諸講義には啓蒙的な明快さと見通しのよさで今でも魅力がのこっている(東洋大学の『井上円了

選集』に数点が復刻されている)。テキストを味読してゆくというのは仏教界で大事にされてきたことだから、その伝統を継ぐ現代の出版物もたくさんある。私には廣瀬泉『観経疏に学ぶ』の語り口が迫力があつた。テクニカル・タームの洪水のような仏教の勉強のためにはどうしても辞典がほしくなるが、そのためには中村元(1912-1999)の『仏教語大辞典』(東京書籍)という名著がある。著者の個性と口調を感じさせる偉業だ。宇井伯寿監修の『コンサイス仏教辞典』(1938、大東出版社)は説明用語自体がさらに説明を要する古めかしいものだが、項目が多くてよそでは得にくい情報を含んでいる。現象即実在論の粉本ともいえる「天台本覚論」に関しては日本思想大系『天台本覚論』(1973)に概観(田村芳朗筆)があるが、さらに天台本覚論そのものの批判である袴谷憲昭(1943-)の『本覚思想批判』(1990)が必読。

6 キリスト教。この方面の知識も哲学史の理解のためには必要だ。聖書、特に新約聖書は原文が庶民の言葉である筈なのに日本語訳は荘重な漢文読み下し風の難しいものが好まれたという奇妙な事情があるが、原文の面影に近づけることを狙ったものとしてカトリックのラゲ訳(古典日本語を使ったウルガータからの訳、中央出版社)およびバルバロ訳(旧約新訳ともに原典からの現代口語訳、講談社)と無教会の塚本虎二訳(四福音書のみ)の口語訳、岩波文庫)、同じく無教会の関根正雄(1912-2000)の『新訳 旧約聖書』、佐藤研・小林稔訳『福音書』(岩波、1996)、および私たちの世代には逸せない田川健三訳(作品社)を挙げておく。仏訳または独訳なら *Bible de Jerusalem* ないし *Jerusalemmer Bibel* が正確であることを聖書神学者の伊吹雄先生(1934-2014)から伺ったことがある(注が充実している)。注は付いていないが宗教改革時代にさかのぼる *Zürcher Bibel* も正確さで伊吹先生のご推薦だった。英語では同じく注釈つきの *The New Oxford Annotated Bible*, 4th ed., 2010 がある(テキストは New Revised Standard Version)。聖書全体にわたるハンディな注釈書では Raymond E. Brown, Joseph A. Fitzmyer, Roland E. Murphy eds., *The New Jerome Biblical Commentary*, 1990 があり、レベルが高い(カトリック)。聖書辞典というジャンルでは古いが今でも参照される *Encyclopedia Biblica*, 4 vols, 1899-1903 (日本で復刻されている)を始め、*International Standard Bible Encyclopedia*, 1915 などがあり、前者は画像で後者はオンラインで利用できる。キリスト教史を大づかみするための出発点としては、Roland H. Bainton (1894-1984) の *Christianity*, 2000 (orig. 1964) がある。手頃な大きさと文章もよく、よく練られた穏当な見解が述べられている。おなじく一般読者向けでは、ジャーナリストの手になる Paul Johnson, *A History of Christianity*, 1976 は肩が凝らない読みもの。ごく最近の通史としてはイギリス人 Diarmaid McCulloch (1951-) の *A History of Christianity*, 2009 とアメリカ人 Robert Wilken (1936-) の *The First Thousand Years. A Global History of Christianity*, 2012 が出ている。最新の知見が盛り込まれているだけではなく、両方ともカトリック・プロテスタント以外のキリスト教にも目を向けた視野の広さが魅力だ。古代世界でのキリスト教はどういう社会的存在だったのかという興味津々のテーマでは、イギリス人 W. H. C. Frend (1916-2005) の *The Rise of Christianity*, 1983 という鬱然たる大著や上記の Wilken の *The Christians as the Romans saw them*, 2003 がある。大歴史家 Eduard

von Meyer (1855-1930) の *Ursprung und Anfänge des Christentums*, 3 Bdn, 1921 は純粹に歴史家の観点からこのテーマを扱っていて、キリスト教史家の観点とは全く異なる見解が提示されている点がおもしろい。哲学史家を取り扱ったものとしては、上掲 J. H. Randall Jr., *Hellenistic Ways of Deliverance and the Emergence of Christian Synthesis*, 1970 があるが、基づく文献がやや古いようだ。Philip Jenkins (1952-) の *The Lost History of Christianity. The Thousand-Year Golden Age of the Church in the Middle East, Africa, and Asia and How It Died*, 2008 はタイトル通り最初の 1000 年のキリスト教史そのものを東方中心に見直そうという意欲作。Bart Ehrman (1955-) の *The New Testament. A Historical Introduction to the Early Christian Writings*, 2011 は大活躍中の著者が書いた教科書。従来型の大河通史なら、Henri Daniel-Rops (1901-1965) の *Histoire de l'Eglise du Christ*, 8 tomes, 1948-65 でアカデミー・フランセーズ会員の華麗な筆を堪能できる (カトリック)。プロテスタント版は Kenneth Scott Latourette (1886-1968) の *A History of the Expansion of Christianity*, 7 vols.。日本語になっているのでは『キリスト教史』(全 11 巻、平凡社ライブラリー) が各国の大家をずらりとそろえた執筆陣。教義面を調べるためには辞典が必要だが、Karl Rahner (1904-1984) 編の *Sacramentum mundi*, 1967-69, 4 Bde. がよく参照されるようだ (カトリック)。新約聖書に出てくる語彙に焦点を合わせた Cohnen-Beyreuther-Bietenhard (hrsg. von), *Theologisches Begriffslexikon zum Neuen Testament*, 1971, 2 Bde. が項目数は少ないもののレベルは高いし、聖書以外のギリシャ古典もカバーしていてまことに勉強になる (プロテスタント)。Jaroslav Pelikan (1923-2006) の *The Christian Tradition*, 5 vols., 1973-1990 は「20 世紀のハルナック」と評された教義史。近世哲学にとっては目の上のたんこぶである「神学」のサンプルとして、危機神学の Karl Barth (1886-1968) の *Dogmatik im Umriß*, 1947、ハイデガーと親しかった「ケーリュグマの神学」の Rudolf Bultmann (1884-1976) の *Theologie des Neuen Testaments*, 1953 あたりをのぞいておいた方がいい (二書とも邦訳あり)。カトリック神学者ではこのごろ Hans Urs von Balthasar (1905-1988) が地位を高めつつあるようだ。非常に多作だった von Balthasar には哲学とクロスオーバーする著作も多く、とくにドイツ観念論に詳しい人物だ。カトリックの『公教要理』の解説である岩下壯一 (1889-1940) の『カトリックの信仰』が復刊されたのはありがたい (講談社学術文庫)。原典も *Catechismo della Chiesa cattolica* をはじめ、各国語版で手に入る。宗教学の観点からのカトリック概説では、Friedrich Heiler (1892-1967) の *Der Katholizismus*, 1923 が有名だ。カトリックとプロテスタントの相違や対立点については、カトリックの観点からの Heinz Schutte, *Protestantismus*, 1967。なお哲学史との関係では対抗宗教改革が重要だが、アドリアーノ・プロスペリ『トレント公会議』は渴を癒す文献だ (邦訳知泉書館)。

7 ギリシャ/ローマ・中世。とにかく古代に関しては常識として知っておくべきことがらが多く、またそれに応えた本も古今東西に渡り数多く出版されている。私の学生のころはアンドレ・ボナル (1888-1959) の『ギリシャ思想史』全 3 巻 (白水社、orig. 1954-1959) とか、呉茂一 (1897-1977) の『ギリシャ神話』(1969) などが田舎の本屋にも並んでいたし、T. R. Glover

(1869-1943) の *The Ancient World*, 1935 や W. G. de Burgh (1866-1943) , *The Legacy of the Ancient World*, 1912、さらに H. D. F. Kitto (1897-1982) の *The Greeks*, 1952 がペリカン版に入っていた (邦訳あり)。ここに Antony Andrews (1910-1990) の *The Greek Society*, 1971 が加わったときにはずいぶんモダンな感じがしたものだ。ずっと古くなるが、吉田健一 (1912-1977) の先生だった G. Lowes Dickinson (1862-1932) の *The Greek View of Life*, 1909 は古代ギリシャだけではなくたしかにパブリック・スクールの古典教育の雰囲気をも伝える古典だ。こんなふうはこのジャンルの名著を挙げはじめるときりがないが、*The Greek Way*, 1930 と *The Roman Way*, 1932 との著者 Edith Hamilton (1867-1963) はイギリス流の cultivation にかわって enthusiasm の伝達に秀でているところにいかにもアメリカの書き手らしい特徴を見ることができよう。これに反してアリストテレス学者として有名な Werner Jaeger (1888-1961) の *Paideia. Formung des griechischen Menschen*, 1933-1947 はいかにもドイツ流で学問的な体裁をとっている。逸するわけにはゆかない (今は一冊本になっている)。しかしこの人が立脚している「新人文主義」に Momigliano や Finley が加えた厳しい批判も併せ読んでおくことが必要だろう。イギリスの Michael Grant (1914-2004)、フランスの Pierre Grimal (1912-1996) はそれぞれ等身の著書を持つヴェテラン啓蒙家だ。彼らの本はクオリティが安定していてどれを読んで損はない。²⁰ 古代文明全般にかかわるのが「地中海」で、これ自体を取り上げた著作は昔からたくさんある。最近のもの例として、John Julius Norwich (1929-) の *The Middle Sea*, 2006 と David Abulafia (1949-) の *The Great Sea*, 2011 を挙げておく。中世に関しては古代ほど多くはないが、ベネディクト会の David Knowles (1896-1974) には de Burgh の中世版ともいべき *The Evolution of Medieval Thought*, 1962 がある。歴史家の手になるものだけに思想以外の知識もいろいろと授けてくれる名著だ。中世哲学に関しては修道院という制度も重要だが、Knowles には *Christian Monasticism*, 1969 もある (邦訳平凡社)。日本語では今野国雄『修道院』(1981)、朝倉文市『修道院』(1995)。前出のヘールの *Mittelalter. 1150 - 1300*, 1961 はここでも中欧生まれの持つメリットを活かし切って俯瞰がきいている。

8 中国哲学史およびインド哲学史に関しては、西洋哲学の枠組みに即したものが私たちにはわかりやすい。末木剛博『東洋の合理思想』はインドから中国まで合理思想を軸に簡潔に要点をまとめている好著 (法蔵館から復刊あり)。立場を変えるたびに新しい概説を出したので有名な大陸の馮友蘭 (1895-1990) のものでは民国期の『中国哲学簡史』が一番評判がよく、大陸から逃れて香港や台湾で活躍した「国学大師」錢穆 (1894-1990) の『中国思想史』(1951) はコンパクトながらもまったく独自の見識で貫かれていて圧巻。ローマと台湾で活動した羅光司教 (1911-2004) の『中国哲学思想史』は7巻9冊の大著だが、「士林哲学」(スコラ哲学) のタームと枠組

²⁰ ドイツのギムナージウムの古典教育に対応したものとして、「注に本文を付けた」ともいべき特殊な小説形式で Wilhelm Adolf Becker (1796-1846) の *Charicles: Bilder altgriechischer Sitte, zur genaueren Kenntniss des griechischen Privatlebens*, 1877-1878 と *Gallus, oder, römische Scenen aus der Zeit Augusts: Zur genaueren Kenntniss des römischen Privatlebens*, 1880-1882 という一対をなす著作がある (いずれも Hermann Göll による改訂新版)。Sittengeschichte に属する事柄に関していちいち典拠を示しているのがおもしろい。

みで書かれている点で私たちにはフレンドリーだ。辛亥革命で活躍した梁啓超（1873-1924）の『先秦政治思想史』（1922）は深さというよりは明快さが売りものと言われるがよくまとまっている。西洋哲学史出身の安田二郎『中国近世思想研究』（1948）は武内義範さんのあとがきが泣かせる。島田虔次さんの『朱子学と陽明学』（1967）は影響力の大きい名著だ。Marcel Granet（1884-1940）の *La pensée chinoise*, 1934 はデュルケーム以来のフランス社会学の成果を生かしたユニークな古典。インド哲学史では、ヒンドゥーの立場に立つインド人学者の手になるものを見ておく方がいい。仏教の位置の測定にもなる。Surendranath Dasgupta（1887-1952）の *A History of Indian Philosophy*, 5 vols が最大規模、新しいのは、Jadunath Sinha（1892-1978）の *Indian Philosophy*, 3 vols., 2006 (orig. 1978)。服部正明『古代インドの神秘思想』（1979）は新書とは思えないほど内容充実（講談社新書⇨講談社学術文庫）。なお中国史あるいはアジア史では宮崎市定（1901-1995）の『中国史』（2冊、岩波全書⇨岩波文庫）および『アジア史概説』（中公文庫）が雄大豪快。宋末でおわっているが、漢文で書かれた那珂通世（1851-1908）の『支那通史』（和田清訳、岩波文庫版全3巻）はカオスのような中国正史の世界をきわめて整然と組織しなおした歴史的名著だ。

9 英米の大学ではさまざまな伝統ある lecture series が毎年行われていて、続々それが刊行されている。著名な書物のなかにもこのような lecture series に起源をもつものも多い。ジルソンの『中世哲学の精神』もホワイトヘッドの『過程と实在』もアーレントの『精神の生』もととはといえば Gifford Lectures からうまれたものだ。このごろでは You Tube でいち早く公開されることもあり油断できない。

10 哲学者の伝記としては、近年 Cambridge University Press がシリーズのようにして出しているものが最新の成果を示している（デカルト、ライプニッツ、スピノザ、ヘーゲル、カントなどが既刊）。ルネサンスの哲学者たちの生涯はさながらピカレスクだが、なかでも波乱に富むのはブルーノだろう。その伝記として、John Bossy（1933-2015）の *Bruno and the Embassy Affair*, 2002 がほとんど推理小説なみの論点を示しているが、著者がのちにブルーノ「スパイ」説といういちばん面白い点を撤回してしまった。そのほか、Ray Monk（1957-）は *The Spirit of Solitude*, 1996 と *The Ghost of Madness*, 2001 の二冊でラッセル自伝の偶像破壊をおこない、*Brideshead Revisited*, 1945 の作家 Evelyn Waugh（1903-1966）の孫の Alexander Waugh（1963-）は *The House of Wittgenstein*, 2008 でウィットゲンシュタインをファミリーのなかに置いて等身大で描き出した。Russell と同じく Ayer には自伝 *Part of My Life*, 1977 および *More of My Life*, 1986 とならんで Ben Rogers, A.J. Ayer. *A Life*, 1999 という伝記もある。やはり一種の偶像破壊だ。Jean-Paul Sartre（1905-1980）の *Les mots*, 1964 や George Santayana（1863-1952）の自伝 *Persons and Places*, 1944 および *The Middle Span*, 1945 はむしろ文学作品だろう。哲学者＝ジャーナリストでは、Brian Magee（1930-）の *Confessions of a Philosopher*, 1997 と、Jean-Francois Revel（1924-2006）の *Mémoires. Le voleur dans la maison vide*, 1997 とがある。どちらも英仏、具体的には Oxford と Ecole normale supérieur を舞台に、〈業界〉と

〈業界人〉の生態を生き生きと、そして憂鬱に描き出している。伝記ではないが、60年代初めのオクスフォードの雰囲気をよく伝えるルポルタージュの傑作が、Ved Mehta (1934-) の *Fly and Fly Bottle*, 1962 (邦訳『ハエとハエ取り壺』みすず書房)。ラッセルやヘア (1919-2002) やエイヤー (1910-1989) に会ってきたような気分させてくれる好著だ。哲学者で作家の Iris Murdoch (1919-1999) の伝記は夫の John Bayley (1925-2015) が出してしまったが、Murdoch をはじめ、Philippa Foot (1920-2010), Mary Warnock (1924-), Elizabeth Anscomb (1919-2001), Mary Midgeley (1919-) など第2次大戦後輩出したイギリスの女性哲学者たちは同世代でかなり密接に付き合っていたらしいので、グループ・バイオグラフィが書かれてもいいと思う。Open Court²¹ から出ている *Library of Living Philosophers* は巻頭に intellectual autobiography を掲載しているのが売りもの。単行本で出ている Popper (1902-1994) の *Unended Quest*, 1976 はもともとこのために書かれたものだ。Popper は自分たちとの違いを誇張していると早くから嘆いている Carnap (1891-1970) の自伝は意外とおもしろいものだったのに、近頃の LLP の自伝パートはどうも無味乾燥なのが多いのはどうしてなのだろうか。

「業界人」の身の上話は結局いつもどこもそうはかわりがない、と感じる私が年老いたというだけのことなのだろうか。それよりかは William Somerset Maugham (1874-1965) の自伝 *Summing up*, 1938 のなかに出てくるエピソード、つまりモームがハイデルベルクでクーノー・フィシャー (1824-1907) の講義を聴き、すっかりスピノザに魅せられた青春の思い出話のほうが私にはおもしろい (邦訳『要約すると』新潮文庫)。²² 忘れてはならないものがあつた。Henri Gouhier *se souvient...: ou Comment on devient historien des idées*, 2005 はデカルト研究者として著名なアンリ・グイエ (1898-1993) へのインタビューであつて、まさに「人はいかにして思想史家となるか」が語られている。伝記小説ではスピノザを主人公にしたオーストリア作家コルベンハイヤー (1878-1962) の *Amor Dei*, 1908 が有名だ (手塚富雄訳あり)。アメリカ人作家 Gore Vidal (1925-2012) の *Creation*, 1981 は未訳だが、ゾロアスターの孫を狂言回しにしてアテーナイからインドを経て中国に旅をさせる、という設定。思想的にこんなに大物ばかりが登場する小説はほかに例がないだろう。アンソニー・バージェス (1917-1993) は20世紀を代表する99冊の小説のうちを含めている。もちろんウンベルト・エーコ (1932-2016) の『薔薇の名前』(1980) は現代の古典だ (邦訳創元社)。イタリアでは注釈つきの版も出ている。

II テクストを読む作業とは読解の稽古にはかならない。読解のテクニックの体系化は各国の国語教育において行われてきたことだ。フランスでは *explication de texte* だし、イタリアでは *lettura*、ドイツでは *Stylistik* という学問にまで発展しているし、イギリスの *close reading* もそうだ。私たちの世代はエーリヒ・アウエルバッハ『ミーメシス』(*Mimesis. Dargestellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur*, 1946, 邦訳ちくま学芸文庫) で〈テクストを読む〉ということを知った。アウエルバッハ (1892-1957) では文体分析によってテクストから手

²¹ 鈴木大拙が在米中ここに勤めていたことがある。

²² そもそも、『人間の絆』と訳されているモームの小説の原題は *Of Human Bondage* であつて、スピノザのエティカ第4部を借用したものだ。

品のように繰り広げられる広大な精神的展望が圧巻だったが、Leo Spitzer (1887-1960) はより即物的に文章に密着して鮮やかな手際を示す (たとえば *Essays on English and American Literature*, 1962 に収められた諸篇が手頃だろう)。これらは哲学テキストの読解に応用可能だと思う。実際、フランスやイタリアには哲学古典の教科書版がたくさん出ていて、それらの脚注は大学者が作成していることも多い。事項注だけではなく文意と文理に関する注も多く、読解の実物教育の場だ。³³ イギリスではいわば国学者である Clive Staples Lewis (1898-1963) の *Studies in Words*, 1967 がそれに近く、哲学のタームとして取り入れられた nature とか world とか free とかいう英語のもともとの意味がじっくりと探られてゆく滋味ゆたかな書物だ。

12 近世哲学史では古代中世ほど文献学的知識と訓練は表に出ないが、テキストの世界がどうい
うものであるのか、ということは知っておかねばならない。西洋文献学では、ギリシャ・ローマ
の古典に関して、および聖書に関して手引きや案内が出ている。文献のデジタル化という新しい
事態を踏まえたものとしては、たとえば、*The Cambridge Companion to Textual Scholarship*,
2013 がある。身近な日本語テキストの文献学では山下浩の『本文の生態学』(1993)、萩谷朴
(1917-2009) の『本文解釈学』(1994) などが面白い。前者は近代文学、後者は古典文学が対
象。萩谷はこの原論に先立ちいわば実践編を『枕草子解環』(全 5 巻、1981-1983) で示してい
る。これに対して小松英雄 (1929-) の『徒然草抜書』(1990) は原論抜きの実践編として文献学
的思考過程を公開した実物教育だ。そもそも北村季吟 (1624-1705) の『源氏物語湖月抄』を有
川武彦の増註版 (1927) で見ると (全 3 巻の復刊が講談社学術文庫にある)、脈絡をつけながらテ
キストを読んで読解と理解の精度を上げてゆくというわたしたちが携わる作業は本質的にはそこ
に収録されている学者たちが源氏物語に傾注した努力となんら異ならないことがよくわかるし、
宣長の画期性もよく納得できる。中国の文献学に関しても無数にあるが、俞樾 (1821-1906) の
『古書疑義举例』(『古書疑義举例五種』、2005 に含まれている)、孫徳謙 (1866-1935) の『古書
読法略例』(1936) などで、漢字文献の世界固有の問題をのぞき見ることが出来るし、やはり「読
む」ということには東西変わらぬ本質があるな、という感慨も生まれる (ちなみに前者は道光 30
年の進士である)。

13 論理学について。これはそれ専門の方による紹介がいくらかもあると思うので、自分の体験だ
け触れておく。記号論理学は、「ツリー・メソッド」の Richard C. Jeffrey (1926-2002) の
Formal Logic. Its Scope and Limits の初版で勉強した。しかし近世哲学史の勉強と研究にとって
必要なのはむしろシロジズムを中心とするオールド・スタイルの伝統的論理学のほうだ。こちら

³³ この点に関し平川祐弘氏の次の発言がある。「それでその教科書がどういうふうにできているかという
と、下に注釈がついているのです。その注釈を有名な学者たちが競って書くわけですが、それが言葉の解釈でも
文章上の解釈でも非常によくできていて、程度が実に高い。読んでいてつくづく感心させられることが多
い。はっとさせられる解釈もありますが、だいたい非常におとなの見方をしている。形而上学的な観念には
捉われていない。(・・・) やはりカトリックの国で、カトリックの坊さんは人間心理を非常によく見抜きま
すね。エクスピリカシオンというのは、カトリックの坊さんの相手の立場を見抜く、そういうことと重なっ
て出てきているのじゃないのか。」(『講座比較文学 第8巻 比較文学の理論』所収、「座談会 比較文学と比
較文化」での発言、257 頁、1976)。同感である。

は H. W. B. Joseph (1867-1943) の *Introduction to Logic*, 1916 が集大成している。アメリカの大学教科書のスタイルで新旧論理学をカバーした Irving M. Copi (1917-2002) の *Introduction to Logic* は 14 版まで達した平明で息の長いテキストだ (問題文の取材範囲が広くておもしろい)。シロジズム論理学から記号論理学に進み、paraconsistent logic などの最近の話題学まで手際よく概観しているのは、Harry J. Gensler, *Introduction to Logic*, 2010。日本語のものでは上田泰治『論理学』(1967) が伝統的論理学も手堅く説明している。「記号論理は代数以前」だから臆するなと喝破する大関将一『記号論理学読本』(1954) は記号論理学の啓蒙時代を伝える本だが、伝統的論理学の部分の説明がよくこなれていてありがたかった (中埜肇さんの手になる様相論理学の章は先駆的ではないだろうか)。論理学史としては、日本語では末木剛博『記号論理学 その成立史の研究』(1962) および山下正男『論理学史』(1983) があり (両者とも非常に個性的)、William and Martha Kneale, *The Development of Logic*, 1962 が古典。

最後に一言。語学学習法の古典かつ一種の教養書 (むしろ修養書か?) として渡辺照宏 (1907-1977) の『外国語の学び方』(1962) を読むことは時代の隔たりを超えて価値があると信ずる (岩波新書)。本書を読むと、外国語を学ぶというのはすごいことなのだ、という感慨にうたれる。あるいは、日本で外国語学習ということに与えられてきた意義について文化史的に考察したくなる。ほかの国では類のないジャンルの本だと思う。また清水幾太郎『論文の書き方』(1959) は今風の技術本ではなく等身の著書を持つ著者のいわば体験談だが、「書くことは観念の爆発である」(126 頁) というセリフが忘れられない名著だ。

もう一点だけ紹介させてほしい。

渡邊慧²⁴『時間』(1948) に次のような話が出てくる。

「私が大学の 3 年になった時、藤原咲平先生²⁵から気象学の演習をして頂くことになった。阪大の伏見康治²⁶君が帝大新聞に数年前に、彼の聞いた講義の思い出ばなしを書いたことがあった。その時、彼は藤原先生の講義が支離滅裂の『悪』講義であったが、一番刺激と暗示を受け、結局得るところが最も多かったという意味のことを書いていたように覚えている。この点では私も全く伏見君と同じ感想を分かち合うことが出来る。藤原先生の演習の指導中にうかがった辻褄の合わない数々の御意見は今でも私の頭の中に残っていて、何か新しい力を与えている」(122 頁)。

One who deals with eternal things is in no hurry.

Georg Tintner

²⁴ 渡邊慧 (1910-1993) 物理学者で時間学会の創設者。東京高校出身。渡邊はフランス留学中、藤原の業績を知らなかった Painlevé に抗議に行った思い出も書き遺している。Paul Painlevé (1863-1933) は数学者で政治家、第三共和制時代に 2 回首相を務めた。

²⁵ 藤原咲平 (1884-1950) 気象学者、中央気象台長。

²⁶ 伏見康治 (1909-2008) 物理学者、参議院議員。東京高校出身。

読書ガイド 続編 COMPLETELY NEW MATERIALS!

この頃文学部に入る人は高校で物理を習っていないことが多いそうだ。そこで哲学のための理系読書ガイドを作ることにした。実のところ、社会科学もまた今の高校生の教養目録からはほぼ完全に姿を消しているようなので、こちらもいずれ補足することにする。が、とりあえず第1部は自然科学篇だ。以下の選択の基準は、同じようなレベルの解説書や啓蒙書をいくらたくさん読んでもなんの意味もなかったのではないか、という憂鬱をしいだいに深めながらも、私自身が高校生のころから学生のころに実際に読んだもの、そしてその背景のもとでその後の研究生生活のなかで必要と「嗜み」のために手にしたものである。

科学と哲学との関係は難しい。とくに現代ではいわゆる現代科学の最前線なるものが素人には全く接近できないものとなっているので、いきおい、関心を持ったとしても我々が接することができるのは相当媒介を経た解説である。仮に現場の科学者が書いているにしてもその人の親切心と啓蒙的才能とがかえってあまりにも噛み砕きすぎた解説を生み出してしまうかもしれない。我々はそれがどの程度の近似値なのか知るすべがないのである。だいたい、科学啓蒙書というのは時々刻々移り変わるものだし、科学者自身が書いているとしても、その分手前味噌というか宣伝も十分に含まれている。だからあまり夢中になってしまうのも考えものだと言える。その点で、最前線を標榜するものよりはやや古典的なものを読んだほうがいいということも体験上いえる。

のみならず現代では、研究資金獲得の目的のために科学者たちも啓蒙だけでなく宣伝広報も兼ねさせて私たちにメッセージを発するのがふつうである。そういうものにあまり密着してしまうとなにか滑稽なことにもなろうし、また瞬間的に時代遅れにもなりかねない。カプラとかズーカフの「ニュー・エイジ」ものや旧ソ連の「自然改造」ものを想起せよ（下掲）。科学者たちはその時点で自分の研究テーマを「売って」いるわけであり、私たちは際物ばかりを売りつけられることにもなりかねない。しかし、そもそも科学と哲学との関係のあるべき姿はこういうものではなからう。科学がはたして哲学に何を与えるのか、表面的に類似性やアナロジーが発生することがあったとしても、実際にミスリードされる危険はいつも伴っている。いわばメフィストフェレスの役割を果たしてきたのがファウスト＝哲学にとっての科学でありうることもわすれてはならないと思う。

ただ 20 世紀の物理に関しては下記のガモフやハイゼンベルク、ファインマン、わが国では湯川秀樹や朝永振一郎のような登場人物自体が体験談のようにして語ったもの、あるいは彼らの知的自伝がひとつのジャンルのように豊富にある。これら「科学者たちの楽園」（コペンハーゲンにあったらしい）ものは別の意味で楽しい読み物にもなっているが、このジャンルはむしろ知識社会学の素材だろう。物理学者の伝記もたくさん出ている。アインシュタインはもちろんのこと、ハイゼンベルク、ディラック、シュレーディンガー、パウリ、ファインマン、ランダウ、オッペンハイマーなど。素粒子論関係ばかりだ・・・

しかしながら、近世哲学史の研究のためには数学と物理の基礎知識と関心あるいは憧れが必要であることもあきらかだ。カントもデカルトもヘーゲルもライプニッツも縦横に数学や力学について語っているのであり、その部分がチンプンカンプンだというのはやはり困るのである。

それではネストールの昔語りを聞かせよう。

In Nineteen Sixties, when the world was still young,...

そのころスプートニク・ショックというものがあった（1957年10月4日、スプートニク1号打ち上げ）。この影響でアメリカで大々的に科学教育の振興が叫ばれて、その成果が日本にも波及して出版界ではシリーズその他の枠で大量の科学本が出ることになった。講談社、みすず書房、河出書房といった現在ではあまり科学書とは関係がない本屋でも、そのころには多くの科学啓蒙本を出していたのである。この分野に特化していたのが、東京図書と白揚社。東京図書はランダウ（1908-1968）の教科書シリーズをはじめ旧ソ連の科学啓蒙本を大量に翻訳シリーズとして出していた。ランダウ本は今でも健在だが、科学啓蒙本の方はいまは古書店と古本市でみかけるだけだ（プランケオン仮説や爆縮説、エディントンもびっくりの数字いじりなど、トンデモすれすれのコスモロジカル・アイディアで楽しませてくれたキリール・スタニューコヴィッチ博士はどこへ行ってしまったのだろうか？知っている人は教えてください）。²⁷ 白揚社はアメリカの出版物の翻訳。ガモフのほとんど全著作が全集として出されたのには本人も驚いたのではないだろうか。アシモフ同様、ガモフもユダヤ系のもつストーリー・テラーとしての天分を強く感じさせるひとだった。以下でレビューする書物にはこのように60年代のアメリカにルーツを遡れるものが多い。復刻専門のDoverという出版社があって、ここはこのころの教科書や啓蒙書を多数再刊している。いわばジェネリックに特化した出版社だ。ペーパーバックで値段も非常に安いのでルネとか梅田の丸善ジュンクのDoverコーナーをたまにのぞくといい。

では始めよう。

まず物理から。

ガモフ 『物理の伝記』（邦訳白揚社）

かつては中学校の図書室にも備えてあった、古典的な名著。ガリレオから量子力学まで、著者自筆の肖像画をまじえて生き生きと語っている。DNAの二重螺旋の原型を提案したり、ビッグバン宇宙論を提唱したりという大活躍をしたガモフ（1904-1968）ならではの臨場感・現場感が魅力だ。原書はDoverから廉価版が出ているが、原題は*Biography of Physics*, 1961だったのに、惜しくもDover版では*Great Physicists from Galileo to Einstein*という平凡なものに変えられてしまって残念。ガモフではそのほか量子力学に焦点を絞った*Thirty years that shook physics*, 1966も臨場感に溢れていていいものだ（邦訳河出書房）。このタイトルが何のパロディかわかる

²⁷ インターネットのおかげでスタニューコヴィッチ博士のその後がわかった。1916年生まれで1989年に亡くなった、完全にソ連時代に生きた学者だったのだ。博士の原論文もダウンロードすることができた。

人はいるかな？もう一冊、ガモフが教科書として書いた *Physics. Foundations and Frontiers*, 1960 は高校教科書くらいのレベルだが、彼の啓蒙書と連続的な雰囲気の良い本だ。今では総人付属図書館の南書庫で眠りに付いている。

アシモフ *Asimov's New Guide to Science*, 1984 (orig. 1965)

SF界の大御所、かつ great explainer として知られた人物 (1920-1992) の代表的な著作 (最終版)。取材が物理化学生物にわたって広く、文章は平明だし、とにかく説明がうまい。アシモフの著書はクオリティが安定しているし、いきなり最先端に飛ぶのではなく、なんでも基礎の基礎から着手するという用心深い点が特徴だ。コスモロジーという分野はめまぐるしく流行が交替しているが、彼の古い *The Collapsing Universe*, 1977 がいまでもおもしろくよめるのは、この流儀で書かれているおかげだ。

ガードナー *The New Ambidextrous Universe. Third Edition*, 2005 (orig. 1964、初版の邦訳紀伊国屋書店)

Scientific American 誌の科学コラムを長年執筆したガードナー (1914-2010) はカルナップ門下の哲学出身者である。これは彼の等身の著作の中でも代表作だ。対称性というテーマを軸に哲学的にも物理的にも幅広い題材を扱っている。第3版まで重ねたことにも評判のよさがうかがわれるだろう。ガードナーには *Relativity Simply Explained*, 1997 (orig. 1962) という相対論の楽しい挿絵入り解説書があって、こちらは60年代アメリカのラグジュアリーな雰囲気を今に伝えている。邦訳があるが、原著も Dover で復刻されていて入手可能。

Gerald Holton, *Physics. The Human Adventure*, 2001 (orig. 1973)

本書は科学史家でもある著者 (1922-) が、物理学の教科書を科学史との連携のもとに書いた試みだ。この連携もスプートニク・ショックを乗り越えるためのアイディアの一つだったのに、いつのまにか廃れてしまっているようなのはなにが原因なのだろうか。

John Archibald Wheeler- E. F. Taylor, *Spacetime Physics*, 1992 (邦訳あり)

ファインマン (1918-1988) の先生だったホイラー (1911-2008) が一般相対性理論を根本にして物理を再編成するというすごい方針に基づいて高校生向きに書いた教科書。クワインが褒めていた。邦訳あり。

広重徹 物理学史 I II 1968

わたしたちの世代にとっては、科学史とは広重徹 (1928-1975) のことだった。代表作がこの書であり、近世哲学史研究のためにも必須の文献だ。もっとやさしいものなら、広重徹編『科学史のすすめ』(1970) が好適。60年代は科学史、比較文学、文化人類学が輝いていた時代だっ

た・・・

Max Jammer, *Concepts of Space*. Third Edition, 1993 (orig. 1953)

物理学者 Jammer (1915-2010) の科学史三部作のうち、とくに空間篇はぜひ読んでおいてほしい (後の 2 冊は *Concepts of Force*, *Concepts of Mass*)。アインシュタインの序文だけでも読むに値する。これも Dover が復刻している。翻訳もある。

思想史に近づくと、Alexandre Koyré (1892-1964) の諸著を挙げないわけにはゆかない。最も近づきやすく、かつ近世哲学史専攻のものにとって必読であるのは下のものだ。

***From the Closed World to the Infinite Universe*, 1957 (邦訳が 2 種ある)**

おそらく科学の現場とわれわれが手にする啓蒙本ないし解説本とのあいだには、『三国志』と『三国志演義』くらいの差がある。そういう意味での『三国志演義』のプロトタイプから紹介しよう。さしずめ『三国志』の著者陳寿が書いた『三国志演義』ということになるだろう。

Arthur Stanley Eddington, *The Nature of Physical Reality*, 1928

現代物理学を物理学者自身が一般向けに説明するという現象のパイオニアがエディントン (1882-1944) だった。これがハイゼンベルク (1901-1976) を経てホーキング (1942-) やワインバーグ (1933-)、サスカインド (1940-) などまで続いているわけだ。本書はギフォード・レクチャズとして行われたもので、明快さで有名。熱意余ったの哲学的放言というかやりすぎをさっそく女性哲学者のスーザン・ステビング (1885-1943) がとっちめたエピソードでも有名。ちなみに数あるエディントン本では *Space, Time and Gravitation*, 1920 が一番本格的だろう (Project Gutenberg にはいつている)。

相対論は啓蒙書の一番多い分野だろう。Three Men Discuss Relativity, 1926 を書いた J. W. N. Sullivan (1886-1937) は現代科学を一般向きに解説する「サイエンス・ライター」のはしり。この流れは上掲のガードナーや下掲のジョン・グリビンに続く。ほかに相対論関係では Bertrand Russell, *ABC of Relativity*, 1925 はラッセルが生活のために書いた pot-boiler だと自認する初歩向き啓蒙書だが、改訂を得て今でも版を重ねている。きわめて平易で明晰だし、専門家からも評価されている。

Albert Einstein, *Über die spezielle und die allgemeine Relativitätstheorie*, 1916

これはアインシュタイン自身の手になるコンパクトな啓蒙書。非常に簡明直裁な文体と論法が本人ならでだし、付録 4「相対性理論と空間問題」では哲学にも触れていて興味深々だ。今でも手に入る。Einstein と Leopold Infeld (1898-1968) の共著 *The Evolution of Physics*, 1938 は古典だ (邦訳岩波新書)。評伝形式の啓蒙書では、定評ある Philip Frank (1884-1966) の *Einstein. His Life and Times*, 1947 のほか、Jeremy Bernstein (1929-) の *Einstein*, 1973 もコンパクトで流暢だ。異論を交えながら解説するという異色のスタイルを味わえるのがフォック＝カンパニ

エーツ＝ソコロフスキー『相対性理論の考え方』（特にフォック執筆の部分がおもしろい。1968、東京図書）。

相対論はテーマを絞りやすいのかすっきり感のある好啓蒙書が多い。量子力学が南部陽一郎（1921-2015）の下掲書を見ても迷宮の観を呈するのとは大違いだ。

南部陽一郎 クォーク 第2版

ノーベル賞学者の書いた啓蒙書として講談社ブルーバックの中での白眉。ビジュアルな量子力学の世界を坦々と語って明晰だし、これもまた読者から物理学者が輩出した書だという。しかし本質的にはとても難しい。

Frank Close, *Lucifer's Legacy*, 2000

対称性を糸口として量子力学の世界への案内を果たそうとしている。

John Gribbin, *In Search of Schrödinger's Cat*, 1984

Gribbin（1946-）のたくさんの本のなかでも本書はベストセラー。クリアすぎるくらいの語り口はもちろん『三国志演義』の範疇だが、コメント付きビブリオグラフィーが詳しくて便利。

生物学関係でひとことだけ付言しておく。英語なら Richard Dawkins（1941-）が啓蒙家としては大活躍中だ。代表作は *Selfish Gene*, 1976 と *The Blind Watchmaker*, 1986。進化論という英米ではどうしても宗教との争いを誘発する。無神論者を標榜するドーキンズが討論会で宗教関係者と衝突している動画が You Tube にはたくさん出てくる。亡くなったスティーブン・ジェイ・グールド（1941-2002）の *Wonderful Life*, 1989（邦訳『ワンダフル・ライフ』早川書房）はカナダのバージェス頁岩でのカンブリア紀化石の発掘という事象に絞って進化論につき、研究と科学者の個性や世界観との相関というような問題について、実に興味津々のストーリーを語っている。進化論は宗教との関係を離れてもなお哲学の問題であり、さらには歴史の問題でもあることを示唆する本書は、科学について私たちが考えるために物理とは別のいい材料を提供してくれている。

日本のサイエンス・ライターでは私はなくなった金子隆一（1956-2013）を愛読していた。石原藤夫（1933-）と共著の『超人工頭脳』（1985）あたりにはじまってたくさんある彼の本はすべて well-crafted だ。取材が行き届きよく咀嚼されている。なんだか昔の受験参考書みたいなタイトルだが『よくわかる宇宙論』（1991）はとてもいい本だったし、だんだんと彼の独壇場となっていた、『覇者・恐竜の進化戦略』（1994）『大進化する進化論』（1995）『新恐竜伝説』（1997）といった恐竜と進化論関係のものも読み直しに耐える好著だ。科学者の手になる啓蒙書としては長岡半太郎門下の山内恭彦（1902-1986）の『現代科学論 ある物理屋の見た世界』（1970）。寺田寅彦門下の坪井忠二（1902-1982）の『数理のめがね』（1968）『力学物語』（1970）はもともと

「科学朝日」²⁸に連載されたもので「簡単な代数を使うだけでも、かなり高尚なところまで行くことができるということは、書いている私にとっても面白かった」(後者の「まえがき」と述懐している名著。どうしてどこかの文庫が復刊しないのだろうか。随筆に近づいたものとして寺田寅彦門下の平田森三(1906-1966)の『キリンのまだら』(1979)など。戸田盛和(1917-2010)のシリーズ『物理読本』4巻(1997-1999)は網羅的。上の四人は東大物理出身だが、湯川秀樹と朝永振一郎に多くの啓蒙的文章があるのは周知の通りである。そのむかし『科学者随筆全集』(学生社)という不思議なものがあって、小倉金之助、中村幸四郎、彌永昌吉、秋月康夫といった人たちのかきものが収められていた。

アメリカでは電話帳のように分厚い大学教科書がたくさん出版されている。付属図書館 2 階でサンプリングすることができるが、Halliday-Resnick-Walker, *Principles of Physics*, 2013 はいろいろな工夫を凝らしてあって、見てたのしい。

数学に移ろう。

Morris Kline, *Mathematics in the Western Culture*, 1953

一般読者向きの著作や教科書を数多く出したクライン(1908-1992)の代表作。邦訳あり。著者の数学観が古いという批判もあるが、常識を身につけるにはそのほうがよいかもしれない。*Mathematics for the Nonmathematician*, 1985 (orig. 1967) のほうは数学的内容がより豊富だ(Dover 版あり)。問題と解答までついている。かつてのヨーロッパでは数学者もこれだけ人文系の教養があったのだ、という見本でもある。

吉田洋一・赤撰也 数学序説 2013 (元版 1954)

文系の一般教養向けに書かれた教科書。歴史と数学思想に焦点をあわせて書かれている。レヴェルは上掲のクラインのものと同じくらいだが、こちらはずっと簡潔に書かれている。ちくま文庫に入ったのは同慶に堪えない。私は赤さん(1926-)の高校参考書『新講 数学』で勉強した

遠山啓 無限と連続 1952

昭和 20 年代から 30 年代までの時代を代表する数学啓蒙書。これにインスパイアされて数学者になった人も多いという。ひじょうに平易に書かれていて、この書自体が遠山さん(1909-1979)の「水道方式」の実践だ。数学上の概念にさりげなく政治的なメタファーが仕掛けられているのも微笑ましい。私たちの世代には遠山さんは吉本隆明(1924-2012)の先生として有名だった。

²⁸ 「科学朝日」「科学読売」「自然」が並び立っていた 1960 年代、70 年代は科学少年にとっては幸せな時代だった。筒井康隆(1934-)の商業誌デビューは「科学朝日」でそれまで連載していた山川方夫(1930-1965)が急逝した後を受けてだった。リアルタイムで読めた私は「遊民の街」の味わいが忘れられない。

William W. Sawyer, *Introducing Mathematics*, 4 vols, 1964-1970

60年代の有名な数学啓蒙家ソーヤー（1911-2008）の手になるシリーズ。当時も数学教育の刷新が叫ばれていたが、New Math というグループの代表者がソーヤーだった。今では批判もあるようだが、高校の数学の時間に読んでいた人がいた。

Richard Courant-Herbert Robbins, *What is Mathematics?*, 1941

Courant（1888-1972）の講義ノートに発するこの書は数学入門の古典。近世の数学の王道としての微分積分が焦点となっていて、骨格がしっかりとしている。新版で増訂している Ian Stewart（1945-）は数学観を異にしている不調和だと感ずる。

Alfred North Whitehead, *An Introduction to Mathematics*, 1911

もう100年も前にかかれたもので「古い数学」だが、本書もひじょうに堅実な構造と見通しに貫かれている。このように常に実用性という点をわすれないのが伝統的なイギリスの数学観であり、それを体現しているホワイトヘッド（1861-1947）はラッセルと好対照をなしている。*Principia mathematica* と同時期に書かれていたのだが、ホワイトヘッドの場合は〈基礎論〉は遠い遠い背景として瞥見できるだけである。もともとは Isaiah Berlin（1909-1997）の *Karl Marx*, 1939 や Gilbert Murray（1866-1957）の *Five Stages of Greek Religion*, 1925 などとともに、Home University シリーズに含まれていた。ちょっととっつきが悪いが、手ごたえがあるし、お勧めだ。

Carl B. Boyer, *The History of the Calculus and Its Conceptual Development*, 1959

ギリシャに始まりワイエルシュトラスに至るまでの微積分のオデッセイが語られている本書は数学史の古典である。実にスリリングな読み物で、ライプニッツ・バークリ・カントなど近世哲学史のスーパースターたちも登場する。必読だ（Dover 版あり）。

James. R. Newman ed., *The World of Mathematics*, 4 Vols., 2003 (orig. 1956)

数学に関する文章のアンソロジーとしては決定版。Dover 版で入手できる。

Aleksandrov-Kolmogorov-Lavrent'ev (eds.) , *Mathematics. Its Content, Methods and Meaning*, 3 vols. in 1 volume, 1999 (orig. 1966)

これは旧ソヴィエトで行われた啓蒙活動の産物だ。当時の超大家たちが各分野を平易に解説している。Dover 版がある。

Timothy Gowers ed., *The Princeton Companion to Mathematics*, 2008

近年あらわれた一般向きのものでは質・量ともに白眉だと思う。なるべく数式を使わずに最先

端まで説明してある。

「数学書」の見本としては、2冊だけ挙げる。

デデキント 数とは何か そして何であるべきか

ロイスや西田幾多郎をはじめ哲学にも大きな影響を及ぼした古典。邦訳に含まれた「連続性と無理数」が現れた1872年はデデキント、カントル、メレ、ワイエルシュトラスが同時に同じ着想を公にした奇跡の年だ。新訳が出た（ちくま学術文庫）。

Abraham Adolf Fraenkel, *Abstract Set Theory*, 1966

数学とクロスする部分では微積分のほか集合論が歴史的に重要だが、フレンケル（1891-1965）のこの書は哲学的に透徹した見識で書かれている重厚な数学書の見本。フレンケルにはBar Hillelと共著のものもあって、いずれも数学書とは思えないくらい哲学への言及が多いのに驚く。のみならず、カント協会会員のために講演した *Zehn Vorlesungen über die Grundlage der Mengenlehre*, 1927 という名著もある。こちらは哲学専攻者のための集合論解説で、語る方聞く方ともに羨ましい気がする。田邊元が『数理の歴史主義展開』で引用している。

Enjoy your planet while you can!